教会とインターネット礼拝

日本フリーメソジスト桜井聖愛教会牧師

大澤 恵太

1、はじめに

2019年の暮れに新型コロナウイルスによる感染症が最初に確認されてから、2020年に入って世界中で猛威を振るうようになりました。日本においても2月頃から警戒が叫ばれるようになり、4月には政府による日本全国を対象とする緊急事態宣言が発出される事態となりました。社会においても甚大な影響を与えた新型コロナウイルスですが、それはキリスト教会においても同じです。人と人とが顔を会わせることがいけないこととされるという考えられないような風潮が起こり、身の回りで次々にコミュニティが門を閉ざすようになる中で、教会も対応に迫られました。現在、様々な場所で、コロナ禍を通して教会はどのようなことを経験したのか、それを踏まえてこれからの宣教にどのように向き合っていくべきなのかということが検証されています。教会が、このような時期を経て本質的なものに目を留めることができるようになり、この世における宣教という神の業に参加していくことができればと願っています。

キリスト教会がこのコロナ禍の中で経験した最も大きなことは、主の日と呼ばれる日曜日の礼拝に関わることだと思います。集まることが良くないこととされている社会の風潮の中で、教会はどのようにして礼拝を行うかということに苦慮していました。それは、今も、またもうしばらくの間、教会が抱えることになる課題になることだと思います。教会に集まっている人々を守る、地域の人々を守るという観点から、教会の自律性¹をもって会堂への来会の自粛を促したり、あるいは最低限の者を除く全面的な来会自粛措置をとったりする教会も増えました。対応として会堂に集まることそのものの自粛をかけるか否かは様々ですが、少なくとも礼拝に来ることの自粛が求められている教会員に対する配慮としての対応が必要となりました。そこで、各教会がこぞって取り上げたのが、インターネット礼拝という手段でした。今、実に多くの教会がオンラインでの礼拝を行っています。しかし、インターネット礼拝とは何なのか、インターネット礼拝は集まる形での礼拝の代わりになり得るのか、そういった検証をする間もなく、迫られるままにインターネット礼拝を行っている教会も多いと思います。ここでは、コロナ禍におけるインターネット礼拝に何が求められるのかを考えると共に、ポストコロナの時代にもインターネット礼拝が行われるとすれば、その際に何を考え

¹ 吉田隆『ウイルス禍についての神学的考察』（論文）

<https://krts.net/wp-content/uploads/2020/03/corona200320.pdf>

ておくべきなのか、そのようなことを考えたいと思います。

2、礼拝とは何か

「教会とインターネット礼拝」というテーマについて考察するために、まず礼拝とは何かということについて考えなければなりません。礼拝とは何かという神学的課題については、多くの人々の関心を集めるものではありませんが、現代という時代の中で礼拝そのものの本質について考察されることは、どれほどあるでしょうか。ミラード・J・エリクソンは教会とは何かという本質的課題について「キリスト教思想史の中で、教会論が他の教理のような直接的で完全な注目を集める時期がなかったという事実」のゆえに教会という言葉が多様な意味で理解され、その本質が捕えられていないということを指摘しています²。同様に、礼拝についても、現代という文脈の中でその本質を問う議論は意外にもあまりなされていないのではないかと思います。そして、実にそのことが、コロナ禍におけるインターネット礼拝の是非に関する議論を土台のない意見のすれ違いに終始させているようにも思われるのです。

本来は、礼拝とは何かということについて、教理として礼拝とは何かを考える組織神学的観点、教会の歴史を辿りながら礼拝とは何かを考える歴史神学的観点、現代に生きる人間にとって礼拝とは何かを考える実践神学的観点、そもそも聖書が礼拝についてどのように語っているかを考える聖書神学的観点、それぞれから総合的に考察されるべきなのだと思います。そのようなことができれば画期的だろうと思いますし、そのようなことができればという願いは尽きませんが、私自身は時間も能力も足りないものですので、ここでは、私自身がどのようなことを考えて教会の礼拝に向き合っているかということをつかち合うことに留めたいと思います。ここに挙げる一つ一つのことを心に留めつつ、インターネット礼拝によってどの点を共有することができ、どの点を補う必要があるのかを考えてまいりたいと思います。

a. 教会における礼拝の位置づけ

伝統的に、礼拝は教会から切り離すことができないもの、教会に必ずなければならないものとして理解されています。教会にとって礼拝がどれほど重要なものであるかという課題は、当然のことながら、聖書において礼拝というものがどれほど重要かということに関連があります。つまり、教会が先あって礼拝がその中にあるというわけではありません。「主の名を呼ぶ」礼拝（創世記4章26節）は、疑いもなく教会あるいは共同体よりも先に起こったものであり、礼拝は、神が人間に期待しておられる神との関係性に関わるもの、また、人間の霊における本質的な必要です。礼拝とは、ヘブル語の「カーハール」（出会う）という語が

² ミラード・J・エリクソン『キリスト教神学 第4巻』いのちのことば社 2012年 212頁

示すように、人が「生ける神と出会い、会見、対話の中で教えと祝福とを受けながら、神の民へと形造られていく経験」³です。旧約聖書を見ると、礼拝は個人における神との出会いから始まり、共同体としての神との出会いに発展しています。父祖の時代において個人的に神を礼拝していたところから、出エジプトを機にして共同体で礼拝をするようになります。そして、捕囚時代のシナゴグでの礼拝、そこからキリストの死と復活を経て、新約聖書におけるクリスチャンの共同体の礼拝へと引き継がれていきます。キリスト教会は、キリストによって贖われた礼拝共同体であると言えます。

公同礼拝をしない教会はありません。礼拝をやめたとき、教会は「教会であること」をやめたのです。むしろ、礼拝に集うところにこそ教会が成立しはじめるのだ、と言うことができます。聖書の時代、そして二〇〇〇年に及ぶ教会の歴史全体が、神への礼拝を死守し続けたところの「神の民の礼拝史」だったのです。⁴

また、教会と礼拝を切っても切れない関係のものとして結び付けているのは、言う間でもなく、神の言葉です。教会とは、本質的に神の言葉が語られる場所なのです⁵。そして、その神の言葉の宣教のための中心的活动が礼拝です。もちろん、礼拝以外の集会でも神の言葉は語られるでしょう。それは当然のことです。しかし、それらは教会の中心的活动となされているわけではありません。教会は、神の民が一同に会する礼拝において、神の言葉と聖礼典によって、神の民とこの世にキリストを指し示し続けるのです。

礼拝は神によって造られた人間の根本的な必要であり、神が人間を礼拝の場へと招かれるその招きに応えることによって、その必要が満たされます。教会は、そのようにして神を礼拝する者たちの共同体です。礼拝において、神の民は神の言葉によって新しい命を得ます。礼拝は教会の根源的な目的そのものであり、確かに教会と礼拝は切り離すことができないのです。

b. 共同体としての礼拝の原点

聖書から共同体としてささげる礼拝の原点と言える光景を見てみましょう。出エジプト記 19 章には、エジプトから脱出したイスラエルの民が、シナイ山のふもとに到着した際の出来事が記されています。これは、イスラエルの民が共同体として神にささげた最初の礼拝と言えます。もちろん、この箇所を共同体としての最初の礼拝として見るには、礼拝の定義を考えておかなければなりません。この後、イスラエルの民には律法が与えられ、彼らはその律

³ 今橋朗『礼拝を豊かに 対話と参与』日本基督教団出版局 1995 年 15 頁

⁴ 同上 11 頁

⁵ 「プロテスタント信仰の先祖は、教会が教会であること目じるしとして、説教と聖礼典をあげました。」渡辺信夫『教会論入門』新教出版社 1997 年

法に基づいて礼拝を行います。その際には、いけにえとして動物が屠られることとなります。ここでは、そういう形式での礼拝がささげられたわけではありません。しかし、先に挙げたように、共同体としての礼拝の定義を「生ける神と出会い、会見、対話の中で教えと祝福を受けながら、神の民へと形造られていく経験」であるとするならば、この箇所に記載されている出来事もまた礼拝であると言えるでしょう。この共同体としてささげられた最初の礼拝の光景から、「礼拝の要因」「礼拝の場にいる者」「礼拝の要素」を以下のように見ることができます。

<礼拝の要因>

①神による選びと招き

礼拝は神の招きがあって初めて起こる出来事です。神ご自身が選ばれた神の民を招き、その招きに応じて民は神の前に進み出、神を礼拝するのです。

②神による救いの出来事

イスラエルの共同体が礼拝を軸にして神の民として整えられていく中で決定的に重要な土台は、彼らが神によって救い出されたという事実です。この救いの体験は、いつでも彼らが神を礼拝する動力となりました。

③神の憐み

神が民を礼拝の場に招かれる理由、それは神が民を祝福したいと願っておられるからです。神の彼らに対する祝福は神の愛と憐みが土台となっており、神の言葉によって神の民として整えられていくという実態を伴っています。

<礼拝の場にいる者>

①神の臨在

神不在の礼拝はありません。私たちが神を礼拝するとき、いつも神はそこにおられます。私たちが自発的に礼拝をささげていると思うような時であっても、神はいつも礼拝の場に先におられ、神が霊において私たちを招いて下さっているのです。

②神に救い出された民

礼拝には、いつでも神によって招かれた神の民がいます。神はイスラエルの民の中の一部を礼拝の場へと招かれたのではなく、彼ら全体を招かれました。そうして、イスラエルの民全体が礼拝共同体として整えられていったのです。

③神と民の仲介者

イスラエルの民が初めて共同体としての礼拝をささげた際には、神の言葉を神に代わって民に取り継ぐ仲介者がいました。それがモーセです。神によって選ばれ、神によって召し出され、神によって立てられたモーセが、神の言葉を民に取り継いだのです。このモーセが神と民との仲介者となったことにより、民は神からの啓示としての

言葉を受け取ることができたのでした。

<礼拝の要素>

①神からの啓示

礼拝には、いつも二つの要素があります。共同体としてささげられる礼拝では、この二つの要素が交互になされます。その一つは、神からの啓示、ここではモーセを通して語られる神の言葉です。あるいは、この後の律法に基づいて行われる礼拝では、いけにえが屠られ、血がふりまかれることが神からの啓示であるとも言えます。この神からの啓示が礼拝の本質です。

②民の応答

この神の啓示に対して、民が応答します。ここでは、「私たちは主の言われたことをすべて行います。」(8節)と応答します。それは、民の神に対する献身です。自分自身の生活を通して、全生涯を通して、神を神とし、神の言葉に生きることを民全体が共に神に対して宣言するのです。

もちろん、旧約時代の礼拝と新約時代の礼拝では、異なっている点が多くあります。しかし、礼拝においてご自身を現わされる神は同じであり、礼拝が神の民が神に出会う出来事であるという点では変わりません。時いたって、神が真の仲介者なるキリストをお与え下さり、そのお方による贖いのゆえに、私たちははばかることなく大胆に神の御前に出ていくことができます。

c. キリストとの合一としての礼拝

ところで、私たちが神に礼拝をささげるとき、そこでは何が起こっているのでしょうか。それを端的に表わす表現が、キリストとの合一です。礼拝は神の啓示と民の応答によって進められますが、その神の啓示とは、神の言葉と聖礼典です。神は、この神の言葉と聖礼典を教会を通して私たちに与えられます。教会における礼拝において、私たちは神の言葉と聖礼典によってキリストと出会い、キリストと一つに結び合わされるのです。

教会におけるキリストとの合一とは、第一に個人的合一です。主イエスは「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。」(ヨハネ 15章4節)と言われました。私たち一人一人は、キリストというまことのぶどうの木につながる枝であり、キリストにとどまることによって実を結ぶようになります。この主イエスの言葉は、ヨハネの福音書における聖餐の恵みへの招きの言葉です。私たちは、私たちのために身をささげられたキリストを受けることによって、キリストと一つの者とされます。それが聖餐の恵みであり、礼拝の恵みです。

また、キリストとの合一とは、第二に共同体的合一です。キリストによる「わたしにとど

まりなさい」という招きは、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと」への招きに直結します(同 12 節)。そして、主イエスが祈られた「父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしのうちにいるようにしてください。」(同 17 章 21 節)という大祭司の祈りへとつながります。教会を通して共にキリストのうちにとどまるのが、その恵みにあずかるすべての者の一つとします。パウロの言葉を借りるなら、それこそがキリストの体です。キリストによって私たちが交わり一つとされるとき、「キリストによって、からだ全体は、あらゆる節々を支えとして組み合わされ、つなぎ合わされ、それぞれの部分はその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられる」のです(エペソ 4 章 16 節)。その交わりの最も大切な機会、それが礼拝です。

苦難の伴う世界において、苦難を通られたキリストと一つの者とされるということの意義の大きさを思います。私たちは、礼拝を通してそれぞれの場に遣わされてまいりますが、その場でそれなりの苦勞を経験します。時には、前に進むことができないと思うような苦難にでくわすかもしれません。新型コロナの影響下にある世界もまた、苦難の伴う現場です。けれども、私たちはその苦難の世界のただ中で、キリストと一つにされるのです。私たちが苦難を経験しなければ、キリストが私たちのために何をしてくださったのかを知ることはできません。苦難の伴う現実の中でこそ、私たちは私たちのために苦難の道を通り、勝利して下さったキリストの姿を仰ぎ、キリストにあって慰めを得、希望を指して歩み始めることができるのです。それが、この世において私たちが礼拝することをやめられない要因でもあるのでしょうか。

d. 身体性を伴う共同体としての交わり(Fellowship)

「教会」というのは、聖書が日本語に訳されたときの訳語です。「エクレーシア」というギリシャ語の言葉が、日本語で「教会」と訳されたのです。そして、エクレーシアの本来の意味は、「呼び出される」です。まさに、最初のペンテコステの出来事に日にイエスをキリストと信じた三千人もの人々は、神によって呼び出された人々でした。そして、彼らは共同の生活をするようになり、毎日一緒に食事をし、賛美をするようになります。もし、彼らが週に一度しか集まらない人々であれば、最初の教会のもたらすインパクトは、「主は毎日、救われる人々を加えて一つにしてくださった」(使徒の働き 2 章 47 節)と言われるほどのものにはなっていなかったかもしれません。つまり、最初の教会にとって強い身体性による互いの結びつきは、決して小さいものではなかったのです。

このことから、共に集まるという身体性のもたらす影響の大きさを思います。神は、旧約聖書の最初から、人が他者と共に生きるべきことを示しておられます。そして、神が共同体

としての礼拝を守るべきことや、家族と共に過ぎ越しの食事を守るべきことを律法として定められました。新約の時代に入り、イエスをキリストと告白する共同体においては、祭儀律法の多くは守るべき規定ではなくなりましたが、その中で共に集まって礼拝をし、食事をするという身体性を伴う共同の行為の習慣は取り除かれませんでした。私たちは、教会において互いにあいさつを交わし、手を握って互いを喜び、礼拝において共に声を合わせ、聖餐において一つの食卓を囲み、そういった一つ一つのことを通して神の愛、イエス・キリストの恵みとまことを共に体験することができるのです。

これは、イエス・キリストの受肉ということを考えても、とても大切なことです。神が人となってこの世に来て下さったことのインパクトを、私たちは決して忘れてはなりません。神が人の肌のあたたかさをもってこの世に来て下さったからこそ、教会は人の肌のあたたかさにかこだわり続けるべきです。一つの場所を経ることをしなくても、情報を共有することができる時代となりました。しかし、神が人となってこの地上に来て下さった事実がある限り、身体性によって現わされる神の恵みは変わることはありません。だからこそ、教会は集まることをやめてはならないのです。

e. 新しいエルサレムでの礼拝に向かう礼拝

教会が毎週行っている礼拝は、決して同じことの繰り返しではありません。私たちが主の日と呼ばれる日に週ごとにささげている一回一回の礼拝は、トラックを回り続けるランナーの一步一步ではなく、決められたコースで目的地に向かって走るランナーのそれと似ています。教会の礼拝は、同じことを繰り返しているように見えて、実は目的地に近づく一步一步を確かに積み重ねているのです。その目的地の光景は、ヨハネの黙示録に記されています。

私は、この都の中に神殿を見なかった。全能の神である主と子羊が、都の神殿だからである。都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。諸国の民は都の光によって歩み、地の王たちは自分たちの栄光を都に携えて来る。都の門は一日中、決して閉じられない。そこには夜がないからである。こうして人々は、諸国の民の栄光と誉れを都に携えてくることになる。

(ヨハネの黙示録 21 章 22～26 節)

ランナーのために整えられたコースを目的地に向かって一步一步進んで行くマラソン選手のように、教会もまた一週ごとの礼拝を積み重ねていきながら、やがて完成する新しいエルサレムにおいてすべての民がささげる栄光の礼拝に向かって進んでいるのです。

それは、私たちが教会についながってクリスチャンとして生活をしている中で、とても大切な視点です。私たちはクリスチャンであると言っても完全無欠の者ではなく、この地上における歩みの間、絶えず成長し続ける者です。同じように、教会もまた決して完全な存在で

はありませんが、地上において栄光の日に向かって成長し続けているのです。その意味において、教会がささげている礼拝は決して同じものではなく、さらに完成された教会の姿に近づいていく大切な一歩一歩なのです。牧師や長老などの牧会者は、その一回一回の礼拝において一人一人の顔を見ることができると喜びとしており、同時に、今日もその一人一人と共に互いに栄光の姿に近づく恵みにあずかることができるということを喜ぶのです。信徒一人一人も完全ではなければ、当然牧会者も完全ではありません。だからこそ、共に教会における神の言葉と聖礼典においてキリストのからだとして成長することができる希望を共に見つ互いを喜ぶことができるのです。

f. 牧会としての礼拝

牧会者にとって、礼拝というのは大切な牧会の機会でもあります。牧会とは、牧師や長老が自らに委ねられている教会においてなすべき働きの総称です。その牧会には、「教会共同体全体に関わる牧会」と「個人に関わる牧会」という二つの側面があります⁶。その二つの側面は、牧師の中できれいに二分されるものではなく、互いに重なり合っているものです。一つの働きに両方の側面が伴っている、という感覚です。そして、牧会者はその牧会の働きを通して、一人一人のうちに、また教会全体に「癒し」「支え」「導き」「和解」⁷が現れることを祈り願っているのです。ウィリアム・ウィリモンは、この牧会と礼拝の関りについて、「歴史的にも、教会の共同礼拝こそ、牧会的配慮とその行為がなされる第一義的な場と見なされてきた」⁸と語っています。

牧師である私は、この牧会という働きの領域を「責任」という言葉でイメージして捉えています。「責任」というとどこか冷たい感じがしますが、それは希望へと方向づけられる「責任」であり、喜びに満ちた光栄ある「責任」です。ヨハネの福音書 21 章で、ペテロが主イエスから「わたしの子羊を飼いなさい」「わたしの羊を牧しなさい」「わたしの羊を飼いなさい」と言われたように、教会は、神から信徒や求道者、新来会者一人一人を愛をもって牧するように委ねられているのです。そこには神から委ねられているという責任があります。神から委ねられているという喜びがあります。牧会者は、教会が神にあって負っているその光栄ある責任を絶えず身に帯びて感じているのです。もちろん、その責任というのは、本質的

⁶ 越川弘英『信仰生活の手引き 礼拝』日本キリスト教団出版局 2013年 123頁

⁷ 坂野慧吉氏は、『Pastoral Care in Historical Perspective』(William A. Clebsch, Charles R. Jaekle)という本の中で、牧会的ケアの四つ機能として「癒し」「支え」「導き」「和解」が挙げられていることを紹介している。(坂野慧吉・藤掛明著『心の井戸を深く掘る 牧会者とカウンセラーの「魂の知」』地引網出版 2019年 77頁)

⁸ ウィリアム・ウィリモン『牧会としての礼拝 祭司職への召命』新教出版社 2002年 25頁

には牧会者が負っているというよりも教会全体が負っているものです。

礼拝に集った一人一人は、それぞれの意思で来たというのと同時に、神に導かれてその教会にいます。礼拝において、そのお互いが神の言葉を受け取り、神に対して献身し、聖餐の恵みを受けて、またそれぞれのところに遣わされていきます。教会は、礼拝において神の言葉が正しく語られ、正しく現わされるように責任を負います。また、教会は、洗礼を受けた者が生涯神の子として成長し続けて歩むことができるように責任を負います。さらに、教会は、聖餐の恵みを受けた一人一人がイエス・キリストにあって新しい歩みをするように責任を負います。しかも、その責任は、礼拝式を誤りなく行えば果たされるというものでもありません。主イエスによって教会に委ねられているのは主イエスの羊を飼うことなのであって、タスクリストをこなすことではないのです。心と心を通わせながら、神の言葉のあたたかさを一人一人に届けなければなりません。それが、牧会するということです。

礼拝は、教会における最も大切な恵みの手段であるがゆえに、教会において最も大切な牧会の機会と言えるでしょう。

礼拝とは何かということについて、いくつかのことを考えてまいりました。これらのことを考えると、教会がインターネット礼拝を行うに際して、単に会堂で行っていることをインターネット配信しただけでは、“インターネット礼拝”にはならないと言わなければなりません。いかにインターネットを介して、以上に挙げたようなことなどをフォローできるかが重要で、もちろん、インターネットによる礼拝でこれらすべてを補うことは不可能です。従って、インターネット礼拝には、いつもインターネット礼拝以外の部分でのフォローがどうしても必要になるのです。

3、教会におけるインターネット礼拝

a. コロナ禍とインターネット礼拝

コロナ禍におけるインターネット礼拝は、会堂において行われる礼拝をできる限りそのままの形でそれぞれのご家庭で行っていただくとする教会の試みであると言えます。なかには、コロナ禍になる前からインターネット礼拝が行われており、コロナ禍の期間も同じようにインターネット礼拝を継続して行ったという教会もあるでしょう。あるいは、この機会の中でインターネットによる動画配信というスキルを教会として身に付けることができ、それをこれからどのように生かすことができるかと期待しておられる方々もあるかもしれません。しかし、一つ心に留めておかなければならないことは、コロナ禍におけるインターネット礼拝と、新型コロナの影響が完全に落ち着いた後に行うインターネット礼拝は、根本的に全く異なるものだということです。

新型コロナウイルスによる感染症は治療法が確立されていない病であり、現段階では一度かかってしまえば対症療法でごまかしながら回復を待つほかありません。それまでに体力が尽きて亡くられる方もあり、特に高齢者や基礎疾患を持っておられる方は重症化のリスクが高くなります。インフルエンザと比較されますが、やはり決定的な治療薬がないということが教会としても警戒度を上げなければならない一つの要因となっています。教会にとって、会堂に集まることを自粛される方々は、自分自身のためにそうするというのと同時に、社会的な観点から教会のために自粛して下さっているとも捉えるべきです。そのような中で行われるインターネット礼拝は、来会を自粛される方に対して、会堂に来会したときと同様に神の言葉によってキリストと一つとされ、教会がキリストのからだとして一つとされる恵みの手段をインターネットを介して提供することが目的であり、それは、教会が行う最も大切な働きに関わるものです。一方、新型コロナの影響が落ち着いた後のインターネット礼拝は、社会的な影響とは関係なく、一部の人が抱える個別のニーズに応えるための手段の一つとなります。もちろん、教会によって抱える事情が異なりますので、コロナ禍と同じ目的意識でインターネット礼拝を行う教会があることも十分に考えられますが、一般化すべきほどの例にはならないだろうと思われまます。インターネット礼拝に関する意見交換の際には、その点を踏まえておかなければ、認識がすれ違ったままになってしまう可能性があります。

疫病下での礼拝については、さらなる神学的、倫理的な検証が必要な部分であると考えています。

b. インターネット礼拝の可能性

①コイノニアの拡大

会堂での礼拝のみであったならば参与することができなかった遠隔地や病床にある会員が教会の礼拝に参与することができるようになります。

②教会による宣教の範囲の拡大

同様に、多くの人々に礼拝の様子や聖書の言葉、牧師のメッセージを届けることにより、想像を超える範囲で教会の提示する福音を示すことができるようになります。

③家庭における宣教の拡大

公同礼拝が家庭において守られることにより、同居している家族などに時間と場所を聖別する姿を示すことができる。また、その家族も共に礼拝において提示される福音に触れる可能性が生まれます。

④礼拝の本質への回帰

いつものようにいつもの場所で礼拝できることが当然になっていた中で知らず知らずのうちに礼拝堂を偶像化してしまっていたということは、十分に在り得ることです。その中で、環境を変えて公同礼拝を守ることにより、礼拝の本質に気付くよう

になったり、プログラムの一つ一つの意味を意識したりするようになります。

⑤無牧兼牧の教会での活用

複数個所で同時に礼拝を行うことができるようになり、それまで牧師の説教を自分の教会で聞くことができなかつた人々が、牧師のメッセージと共に礼拝を行うことができるようになります。

c. インターネット礼拝の課題

①礼拝の公共性とプライバシー保護のバランス

礼拝は、いつでも誰でも参加することができるという公共性を持っています。ただし、祈祷や説教には牧会的な要素もあり、そこには個人情報が含まれるケースも少なくありません。そのような中で不特定多数に配信される可能性があるインターネット礼拝では、プライバシーの保護に留意した上で可能な限りの公共性を保つ必要があります。

②身体性を伴う共同体としての教会の在り方

空間を共にしていなくても公同の礼拝を守ることができるといえども、身体性を伴う礼拝での交わり(Fellowship)は、礼拝の重要な要素であり、また牧会的な面でも効果の大きいものです。可能な限り、身体性を伴わない礼拝が通常化することのないように配慮することが求められます。

③礼拝に向かうための備えとなる要素

会堂で礼拝をささげる際には、当然のことながら家から外出しなければなりません。着替えなどの外出の支度、移動の労力や時間、会堂に入った時に五感を通して感じるもの、そのすべてが心を礼拝に向けるための準備の要素となります。ところが、自宅でインターネットを通して礼拝する際には、それらの要素の多くが省略されることとなります。そのような環境で、画面に映し出されている映像や音声によって提示される礼拝の流れにどれだけ集中できるかということも、インターネット礼拝の課題と言えるでしょう。

④科学技術的手段の導入の範囲

科学技術の進歩を教会の本質的活動である礼拝の前提に置くには、十分な注意が必要です。電気がなければ行うことができないという位置に公同の礼拝を置くことには、慎重さが求められて然るべきでしょう。また、配信準備する者の技術が必要に対して間に合わないということを完全に否定できなかつれば、礼拝を行うことができないリスクを考えておかなければなりません。

⑤特定奉仕者への負担の集中

配信のための奉仕は、誰もが請け負うことができるわけではありません。また、礼

拝の配信に関わる奉仕は、奉仕者の精神的負担も大きく、特定の奉仕者に特殊な形で負担が集中しやすくなため、そのことに留意して十分に配慮する必要があります。

⑥献金のさきげ方

会堂で礼拝に参加していれば、その場で献金することができますが、インターネット礼拝によって自宅で礼拝を行っているならば、献金するにもワンクッションが生じます。献金は、礼拝における神に対する献身の表明であり、“生もの”です。可能な限り献金しやすいシステムを教会として提示しておく必要があります。

⑦インターネット礼拝の牧会的限界

先に述べたように、礼拝は牧会の大切な機会です。しかし、その牧会の対象となっている人々が牧会者から見えない場所におられるのであれば、できることにも限りが出てきます。同じ空間で挨拶を交わし、様子をうかがう機会が取り上げられるとなると、それに代えられるものはありません。その意味で、牧会者にはインターネット礼拝以外の部分での牧会的な働きかけが必要となります。

d. ポストコロナのインターネット礼拝

コロナ禍におけるインターネット礼拝とポストコロナ期におけるインターネット礼拝は、別のものであるべきということを中心に述べました。では、治療方法の確立などで新型コロナウイルスの影響が終息した際には、インターネット礼拝を行うためにどのようなことを考えておくべきなのでしょう。いくつかのことを簡潔に挙げてみたいと思います。

①集まることの恵みを根底に置く

インターネット礼拝を必要とする方がおられ、個別的な対応としてインターネット礼拝を用いることは十分に考えられることです。しかし、教会としては、やはり身体性を伴う礼拝の在り方を重視すべきであり、その恵みを共有しておく必要があります。集まらなくて良い礼拝で満足させてしてしまう仕方は良いものではありません。その意味で、インターネット礼拝を通常的に用いる人々に対しても、集まることが可能である人々に対してはリアルな交わりを生み出す何らかの仕組みがあって然るべきです。

②届けられた先の魂をも委ねられていることを知る

インターネット礼拝には教会におけるコイノニアを拡大する可能性があることは、コロナ禍で教会が学んだことと言えます。しかし、インターネット礼拝を行うだけでは十分な牧会することはできません。インターネット礼拝を見ておられる方々に対する個別の牧会的な働きかけをすることは、教会の責任であると言えます。

③インターネット礼拝の目的と対象を教会全体で共有する

コロナ禍では、会堂に集まることができない、あるいは自粛することが求められる

方がいることによって、インターネット礼拝の必要性が認められていました。しかし、その影響が社会的に終息した状況の中でインターネット礼拝を行うならば、何を目的として、どのような人を対象にして行うのかを明確にし、それを教会全体で共有しておく必要があります。また、インターネット礼拝によって礼拝される方々も伝道牧会の対象者として向き合っていくならば、教会全体でインターネット礼拝が教会の一部であることを共有しておかなければ、教会の中に交わりのない二つの教会があることになってしまいます。

④福音の本質的な提示について考える

インターネット礼拝やインターネット配信を利用した集会在、これから増えていくことは決して悪いことではありません。むしろ、大いに用いて良いものです。しかし、誰もが気軽に見ることのできる手段であるならば、手段以上にその内容について考えておくべきです。配信されている内容が教会で設定した目的に沿ったものとなっているか、提示されている福音が表面的なものになっていないか、そういったことが重要になってきます。なぜなら、メッセージを配信しやすいということは、誤ったことも配信しやすくなるということだからです。誤ったものとまで言わずとも、コロナを体験した社会は、現代社会を生きる人々に教会が何を語るのかということを鋭い視点で見えてきます。従来神、罪、救いといった教理的な正しさと共に、共感、共生など、人に寄り添い人を理解する姿勢が求められます。

⑤インターネットを介して礼拝する方々の献身の機会を意識する

インターネット礼拝が「礼拝」だと言うのであれば、礼拝者の献身の機会を意識しておく必要があります。礼拝は、神の民が神の啓示的要素に応答して神に献身することを含んでいます。インターネットによる礼拝とインターネット上の礼拝説教サーフィンと何が違うのかということの一つは、そこに真実な献身があるかどうかです。その最も分かりやすいものは献金でしょう。献金の仕方を明確化したり、礼拝の流れの中で何らかの決心を促す時間を設けて見たり、コメント機能などを用いて双方向性を取り入れてみるなど、インターネット礼拝を受けている方が動画を見て終わりとなることのないように、教会側には工夫が求められます。

⑥会堂の礼拝を妨げないための環境を用意する

感染症による緊張感がない状態で会堂で礼拝が行われる場合には、会堂における礼拝に差し支えないための環境を整える必要があります。音響のボリューム設置機材の数など、一時的なことということを受け止めることができた犠牲も、期限的な際限がなくなってしまうと、礼拝が礼拝であることを妨げる要因にもなり得ます。

⑦そのための複数の奉仕者を訓練する

インターネット上での情報交換の様子を見ていると、コロナ禍でのインターネット礼拝においては、牧師自らが配信の奉仕に携わっているケースが多かったと言えます。しかし、インターネット礼拝が恒常的なものとなるならば、牧師が牧会的な働きを犠牲にして配信奉仕に携わることが望ましくはありません。交代要員も含めて、普段から配信奉仕に携わることができる人を訓練しておく必要があります。

4、インターネット礼拝の色々

<公開制限>

完全公開・・・いつでも誰でも見ることができる。

閲覧者制限・・・教会員や客員、求道者など、閲覧者を教会側で制限する。

配信期限制限・・・生配信のみ、主日のみなど、見ることができる期限を制限する。

<形態>

そのまま型・・・会堂で行われている礼拝を、そのまま配信する。

礼拝番組型・・・文字を出す、複数台のカメラを使用するなど、ある程度見ている方の快適さを追求する。会堂における礼拝の環境に影響が及ぶことも考えられる。

動画編集配信型・・・生配信ではなく、事前に収録した動画を編集し、配信する。

バーチャル対面型・・・オンライン会議システム等を使用し、双方向性を取り入れる。
出席者が明確になる。

音声配信型・・・動画ではなく、音声のみを配信する。

家庭礼拝型・・・動画としては説教のみを配信し、教会が提示する礼拝プログラムを、各自が家庭礼拝の形で行ってもらった上で、説教の動画を利用してもらうようにする。

5、結び

迫害によって島流しにされたヨハネは、パトモスという島で主の日に御霊によって幻を見ました。

私ヨハネは、あなたがたの兄弟で、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐にあずかっている者であり、神のことばとイエスの証しのゆえに、パトモスという島にいた。私は主の日に御霊に捕らえられ、私のうしろにラッパのような大きな声を聞いた。(黙示録 1:9~10)

苦難の中に置かれながらも、聖徒たちはそれぞれの場所でそれぞれの手段で主を礼拝していたのでしょう。そして、一人切り出されたヨハネも、パトモスという島で幻を見ていまし

た。コロナ対応に追われる忙しい日々の中で、このことに大きな慰めを得ました。どこにいたとしても、私たちの主は幻を示してくださる方であり、語りかけてくださる方です。どこに置かれていたとしても、語り給うお方は同じなのです。彼らは彼らとして、我は我として、神は必要なように語りかけてくださいます。そして、ヨハネはそこで見た幻を書として書き記し、聖徒たちに送ります。ある意味では、原初的リモート礼拝です。しかし、書かれたものもさることながら、それを通して彼らにもヨハネと同様に語りかけられる主こそ重要です。私たちもまた、彼の書を通して主の語りかけを聞くのです。礼拝の主体は、それがどのような形態であったとしても主なる神ご自身でなければなりません。

新型コロナの緊張感が続く今現在、多くの教会でインターネットを用いての礼拝が行われています。牧会者自ら配信の奉仕に携わっているというケースも、決して少なくありません。その中で、牧師の疲弊ということも大きな課題になっています。牧師は牧師として、信徒は信徒として、孤独を抱えている面があるでしょう。その中で、教会としてインターネット礼拝を行うということであれば、教会全体でその働きを支えていくことができるシステムを構築する必要があります。礼拝が途絶えなければそれでよい、ということではありません。教会は神の言葉が語られる場所であり、その中心的な場所が主日の礼拝です。それは、教会員一人一人が一同に参加する公同の機会です。礼拝が礼拝であるための神の言葉の宣言、キリストご自身を指し示す福音提示、神と会衆の生き生きとした交わり、新しいエルサレムに連なる希望、癒し・慰め・支え・導きをもたらすあたたかな牧会、その一つ一つが現わされるように主に祈り求める必要があります。

また、コロナ後において、オンラインでの礼拝をどのように行っていくか、そのスキルをこれからどのように用いていくか、それも大切なことです。けれども、コロナ禍を通して礼拝の本質を考えさせられた私たちに求められるのは、技術的な進歩ではなく、主の語りかけとしての神の言葉を持ち運ぶことです。オンラインでの礼拝も、そのための一つの手段でなくてはなりません。まず同じキリストの体の肢体として招かれた私たち一人一人が、召されているその場所において兄弟姉妹と共に霊とまこととをもって主を礼拝し、そこから遣わされて、神の国の恵みを持ち運ぶ者とならせていただきたいと願います。そこから見出される恵みが、オンラインでの礼拝にも豊かな実りをもたらすのだと信じています。

(2020年10月19日)